

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 明田川 聡士

台湾は戦前には日本の植民地統治(1895-1945)を、戦後には国民党独裁統治を受けており、二度の「外来政権」に対する不屈の抵抗の結果、1990年代に民主的社会を築き上げるに至った。このような二度の「被殖民」の歴史を抱えた台湾の重層的な近現代史の様相を文学作品により描いて来たのが、客家人作家の李喬(リー・チアオ、りきょう、1934-)である。彼は、歴史の枠組みを借りながら歴史的対象に対する自らの解釈を主題とした作品、という意味で自作を“歴史素材小説”と称している。

本論文の第1章は、李喬最初の“歴史素材小説”で、大規模な抗日武装蜂起の西来庵事件(1915)を描いた『結義西来庵』(1977)における台湾人抗日表象の重層化と、李喬自身のアイデンティティ再編成の過程を、執筆当時の台湾社会の変容、とりわけキリスト教長老派教会による一連の政治的行動の影響などを参照しながら考察した。

第2章は、李喬の代表的長篇小説『寒夜』三部作に対するウィリアム・フォークナー(1897-1962)の日本語訳経由の影響を論じ、李喬が独自の創作手法を確立する過程を明らかにした。

第3章は、李喬の短篇政治小説である「小説」(1982)に対する安部公房の影響を分析しつつ、彼が安部文学受容を契機に1960年代の実存主義的立場から80年代の民主化運動へと展開していく経緯を論じた。

第4章は、戒嚴令解除(1987年7月15日)後の民主化達成過程において、李喬が執筆した長篇『埋冤 1947 埋冤』(1995)が、国民党政権による台湾人虐殺事件である二・二八事件(1947)を史実の展開に即して実録の如く描き出し、歴史的対象を可視化する一方で、寓意に富む虚構性をも内包する小説であることを指摘し、90年代民主化が李喬に及ぼした影響と、彼が同作を通して現代台湾人に喚起した社会的意義について考察した。

これまで李喬小説に関しては台湾・日本において多くの先行研究が蓄積されてきたが、それは主に主題や登場人物、物語の展開などをめぐるものであり、李喬に対する外国文学の影響および彼の作品の重層性に関する研究は寥々たるものであった。本論文は、国民党独裁体制により創作の自由が制約されていた時期にあつては、作品の重層性が重要な意味を有していた点を明らかにした。さらにこの重層性がフォークナーと安部公房という二〇世紀の最先端の文学者の主題と手法とを受容することにより可能となった点をも解明する、という顕著な成果をあげている。李喬文学における客家アイデンティティ問題の検討等の課題を残すものの、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。